

回顧録としての『白氏文集』

はじめに

王漁洋は『帶經堂詩話』で「白古詩晚歲重複、什而七八。(白の古詩は晚歲、重複すること什にして七八)と言ひ、「樂天詩可選者少、不可選者多、存其可者亦難。(樂天の詩は選ぶべきもの少なく、選ぶべからざるもの多くして、其の可なるものを存するも亦た難し)」と言つてゐる。また趙翼は『甌北詩話』で「全集中亦不免有拙句、率句、複調、複意。(全集中にも亦た拙句、率句、複調、複意有るを免れず)」と言ひ、「蓋詩太多、自不免有此病也。(蓋し詩ただ多ければ、自ら此の病有るを免れず)」と言つてゐる。

しかし、「重複」や「複調、複意」は、白居易自身、承知の上のことであつた。作品番號一四八六那波本卷二八「花房英樹著『白氏文集の批判的研究』「綜合作品表」參照」「與元九書(元九に與うるの書)」で「不忍於割截、或失於繁多。(割截するに忍びず、或いは繁多に失す)」と言ひ、三〇二四卷六三「以下、四桁の數字は作品番號を示し、卷數は特にことわらない限り那波本に據る」「題文集櫃(文集の櫃に題す)」詩で「誠知終散失、未忍遽棄捐。(誠に終には散失するを知るも、未だ遽に棄捐するに忍びず)」とうたつてゐる。その切り捨てるに忍びない氣持ちを理解することこそ大切なものではなからうか?そし

て、『文集』全體の中から白氏のありのままの精神生活を探求し、その饒古と繁多を樂しむべきではなからうか?

白居易が生前に記した三七九八「那波本未收」紹興本卷一〇「醉吟先生墓誌銘」の序に「凡平生所慕所感、所得所喪、所經所遇所通、一事一物已上、布在文集中、開卷而盡可知也。(凡そ平生慕り所、感ずる所、得る所、喪り所、經る所、遇う所、通ずる所、一事一物已上、布きて文集の中に在り。卷を開けば盡く知るべし)」とある。彼は〇五七二卷一一「曲江感秋二首」の序で「元和二年、三年、四年、予每歲有『曲江感秋』詩。(元和二年、三年、四年、予每歲『曲江感秋』詩有り)……」と記し、三五四二卷六九「香山居士寫真詩」の序で、「元和五年……時年三十七。會昌二年……時年七十一。……」と記してゐる。このことは、『文集』に回顧録としての要素が含まれてゐることを物語つてゐる。

本論文は、『白氏文集』の回顧録としての一面に着目し、白居易の性癖と文學的特色を浮き彫りにしようとするものである。

回顧による「時間」の層

白居易が自ら編纂した形跡を今に傳える那波本『白氏文集』を概観すると、詩「卷一」・「卷二十」・文「」・「卷五十」・詩「」・「卷五十八」・

丸山 茂

文〔卷六十一〕・詩〔卷七十一〕と作品群の層を成している。その詩群を通讀すると、ある傾向があることに氣付く、それは白居易には、ある時點における感慨や感銘を繰り返し回顧し、「時間の層」を何層にも積み重ねる傾向があるということである。その「時間の層」は、

a、一首の詩の中で

b、複数の詩において

c、『文集』編集過程において

それぞれ見ることが出来る。

では、なぜこのような「時間の層」が顕著に現われるのであろうか？これには大きく分けて外的要因と内的要因の二つの原因が考えられる。

まず、外的要因として、七十五年に及ぶ波亂萬丈の人生が、結果として「年輪」のごとき「時間の層」を形成したこと。つまり、中唐という時代の流れの中で、榮達と挫折を繰り返しながら轉々と官位・官職を變え、いくたびも任地の異動を繰り返したことが、結果的に年輪のような「時間の層」となって現われた、と考えられるのである。

そして内的要因として次の三つをあげることが出来る。

一、多情多感な感性を文字に定着させた白居易は、その時の感銘を第三者のみならず、將來の自分自身にも傳えようとしたこと。

二、詩を日常的なコミュニケーションの媒介として用いたばかりでなく、のちのち、それを讀み返すことを想定して作詩していたこと。

三、人生のひとつこまをうたった一つ一つの詩が、あるまじまりをな

すと、それがそのまま作者のひとつとなりのすべてを再現する「よすが」となる、と白居易が考えていたことである。

以下、具體的な例を擧げて詳述しよう。

a、一首の詩の中における「時間の層」

白居易は、たびたび詩の中に「依舊」という言葉を用いている。全二十例の用例をみると、表面的に變わらないかに見える事物を對比的に取り上げること、「時の流れ」を強調していることがわかる。「昔のまま」という一見ありふれた言葉であるが、白氏の回顧癖を象徴する言葉として重要である。例えば、一三三二卷二〇「題別遺愛草堂、兼呈李十使君。（遺愛の草堂に題別し、兼ねて李十使君に呈す）」では、「曾住鑪峯下、書堂對藥臺。斬新蘿徑合、依舊竹窗開。」（曾て住む鑪峯の下、書堂 藥臺に對す。斬新 蘿徑合し、依舊 竹窗開く）……とうたい、五年ぶりに訪れた遺愛寺の草堂を懐かしんでいる。

白氏の回顧癖は、思ひ出の場所を再度訪れた時に用いる「重過……」「重到……」「重尋……」といった詩題を持つ詩にもあらわれている。

〇八一五卷一五 長安 太子左贊善大夫

元和十年「八一五」四十四歳の作。

「重過秘書舊房、因題長句。（重ねて秘書の舊房を過り、因りて長句を題す）」

〔紹興本小字題注〕時爲贊善大夫（時に贊善大夫たり）

閣前下馬思徘徊 閣前 馬より下り 徘徊せんと思ひ

第二房門手自開 第二の房門 手自ら開く

昔爲白面書郎去 昔 白面の書郎と爲りて去り

今作蒼鬢贊善來 今 蒼鬢の贊善と作りて來たる
 吏人不識多新補 吏人 識らず 多くは新補
 松竹相親是舊裁 松竹 相い親しむは是れ舊裁
 應有題牆名姓在 應に牆に題せし名姓の在る有るべし
 試將衫袖拂塵埃 試みに衫袖を將て 塵埃を拂う

○八三九卷一五 長安 太子左贊善大夫

元和九年〔八一四〕四十三歳の作。

〔重到華陽觀舊居（重ねて華陽觀の舊居に到る）〕

憶昔初年三十二 憶う昔 初めて年 三十二

當時秋思已難堪 當時 秋思 已に堪え難し

若爲重入華陽院 若爲ぞ重ねて華陽院に入る

病鬢愁心四十三 病鬢 愁心 四十三

二二六卷一九 長安 主客郎中・知制誥

長慶元年〔八一二〕五十歳の作。

〔晚春、重到集賢院。（晚春、重ねて集賢院に到る）〕

（前略）

前時謫去三千里 前時 謫せられて去ること三千里

此地辭來十四年 此地 辭し來りて十四年

虛簿至今慚舊職 虛簿 今に至るまで舊職に慚ず

殿名擡舉號爲賢 殿 擡舉を名とし 號して賢と爲す

卷十五所收の○八一五詩「重過秘書舊房……」と○八三九詩「重到華陽觀舊居」をみてみよう。この七言律詩と七言絶句は、どちらも思ひ出の場所を訪れ、昔を思い出しながら、老け込んでしまった今の自分を嘆くという詩である。こうした詩は、日記とおなじように、一部分だけ切り離して讀んだのでは、何の變哲もない平板なものに感じられ

かねない。ところが、作者の生涯を見渡した上でもう一度讀みなおすと、作者の感慨の深さがしみじみと傳わってくる。例えば、○八一五詩には「時に贊善大夫たり」という題注がつけられており、第三句・第四句に「昔 白面の書郎と爲りて去り、今 蒼鬢の贊善と作りて來たる」とある。これを○八三九詩の「三十二」・「四十三」の數字が現わす年齢と呼應させ、その間の出來事を「華陽觀」と「秘書舊房」を手掛かりに辿ってゆくと、初老の贊善大夫となった白氏が、官僚としてスタートを切ったばかりのハツラツとした校書郎時代を懐かしく思ひ出している様子が見えてくる。長安永崇里に在った「華陽觀」は「華陽公主」の舊宅で、校書郎の白居易が、春は友と桃の花を愛で、秋は友を招いて十五夜の月を賞翫した思ひ出の道觀である。そして、親友元稹とともに制科のための受験勉強に勵んだ場所でもある。卷十三所收の○六一九「春題華陽觀」・○六二三「華陽觀桃花時、招李六拾遺飲」・○六二七「華陽觀中、八月十五日夜、招友翫月」は、いずれも白氏が校書郎時代に「華陽觀」をうたった詩であり、卷十五所收の二詩○八一五・○八三九と呼應する。「秘書舊房」の「秘書」は、校書郎の所屬する秘書省で、「舊房」は、白居易にとつては意氣揚々たる若き日の思ひ出の職場である。さらにその十年ほどの間に何があつたかを他の作品から辿って行くと、四十歳の時に母の喪に服するため涇村に退居していたこと、一人娘の金鸞が三歳の可愛い盛りで病死したこと、あるいは、喪に服する前の絶頂期には翰林學士として憲宗皇帝を補佐していたこと、喪が明けて長安にもどつてみると、建物や景色は昔のままなのに、自分だけは皇太子の子守役である太子左贊善大夫になつてしまつていたこと等々こうした彼の人生の移ろいとそれを嘆く氣持ちがだんだん分かつてくる。

卷十九の一二二六詩「晚春、重ねて集賢院に到る」も同様、「十四年」の言葉の重みは『白氏文集』にちりばめられた関連作品を総合的に読み合わせてはじめて実感として伝わってくる。そして、「自此后（詩）江州路上作」という自注のついた作品群（卷十「感傷二〇四八九一〇五二八・卷十五「律詩」〇八六三〇九〇五」）を通讀してはじめて、「前時謫去三千里」の「三千里」にこめられた感慨が傳わってくる。白氏が『文集』を編纂しながら、「自此后：作」と注記する時、彼は過去の作品を媒介に當時を回顧し、過去の自分に歸り、過去の人生を反芻しているのである。

獨立させて讀まれることの多い「長恨歌」「琵琶行」あるいは「秦中吟」・「新樂府」といった物語性を帯びた作品が、それだけで鑑賞に値するのに對して、こうした日記性を帯びた作品は、あるまじき量で、日記や回顧録を讀むのと同じ感銘が加わるからである。制作時期の同じ作品がまとめられ、さらに原注が加えられているため、個々の作品の間に有機的つながりができ、一見、單純に見える一つ一つの作品が相互に響きあい呼應して複雑な深みを増してくるのである。作詩に至るいきさつや動機を丹念に記した詩題や序文も、その時の状況を克明に傳えている。これは、あとからその時の感動を繰り返し再現するための用意でもあったようである。刻々と過ぎ去る時の流れを詩にとどめ、詩に定着された感動・感銘を時を隔てて咀嚼する、いとなく一度限りの人生を何重にも楽しみ、はかない「生」をいとおしむ白氏の心をみることが出来る。

b、複数の詩における「時間の層」
那波本卷七十一には刑部尚書を致仕してのちの老境を淡々とうたっ

た詩が收められている。三六一七卷七一「昨日復人辰」の中で白居易は、「昨日復今辰、悠悠七十春。所經多故處、却想似前身。（昨日復た今辰、悠悠たり七十の春。經る所 故處多く、却て想うに 前身に似たり）……と回顧している。

洛陽に閑居していた白居易にとって、趙村の杏花は、長安における曲江の杏園に代わる春の楽しみであった。三六一八卷七一「病瘡」で「病銷談笑興、老足歎嗟聲。（病は談笑の興を銷し、老は歎嗟の聲を足す）……とうたうほど心身ともに衰弱していたが、残り少ない命を自覺すればするほど春を惜しむ氣持ちは強まっていた。七十三歳の白居易は、三六一九卷七一「游」趙村杏花⁶」で「趙村紅杏每年開、十五年來看幾迴。七十三人難再到、今春來是別花來。（趙村の紅杏毎年開く、十五年來 看ること幾迴ぞ。七十三の人 再びは到り難し、今春 來るは是れ 花に別れんとして來る）」とうたっている。この詩の「十五年來」が活躍の場を洛陽に移して以來の十五年間をさすこととは「十五年來洛下居（十五年來 洛下に居り）」という三六二〇卷七一「刑部尚書致仕」の首句によって分かる。また、「七十三人」の句は、三六二二卷七一「問諸親友」の冒頭二句「七十人難到、過三更較稀。（七十は人到り難く、三を過ぐるは更に較ぶる稀なり）」や三六二六卷七一「開龍門八節灘詩二首」其二の首句「七十三翁且暮身（七十三の翁は 且暮の身）」によって、切實さを増す。さらに廻って卷六十二所收の三〇〇一詩「洛陽春贈劉・李二賓客」を合わせ讀む時、三六一九詩の「今春來是別花來」というさりげない一言の重みに思い至る。同僚の劉禹錫・李仍叔と共に酒を酌み交わし、靜かに洛陽の春を樂しんだあと、「さて明日はどこへゆくか？城東の趙村に行つて杏花を愛でようではないか」と約束する六十六歳の白氏は、老いたり

といえども、まだ太子賓客の職に就いていたし、「明日は…」と誘いかける元氣も残っていた。紹興本卷二十九を見ると三〇〇一詩の結び「…明日期何處、杏花遊趙村。(明日は何處にか期す、杏花 趙村に遊ばん)」という句に「洛城東有趙村、杏花千餘樹。(洛城の東に趙村有り、杏花 千餘樹)」という原注が付いている。

これより先、中書舍人を罷めて杭州刺史に出た五十一歳の白居易は、長安を離れ、商山路を通過して南下し、江州を訪れ、遺愛寺に立ち寄った後、任地である杭州に到着している。那波本・紹興本ともに卷二十「律詩」に収録された作品群を順に読み進めると、道中の所要所における感慨と任地での行動を迎えることができる。卷頭第一首は一三〇八「初罷中書舍人」、第二首は一三〇九「宿陽城驛對月」、第三首は一三一〇「商山路有感」と続く。第三首には「前年夏」「今年」「長慶二年七月三十日」といった日付を織り込んだ長い「序」が付いている。紹興本を見ると、第二首には「自後詩赴杭州路中作」という自注がある。作品番號で明らかのように、上述した一三二二詩「題別遺愛草堂、兼呈李十使君」もこの卷二十に収められている。そして同じ卷の一三八八詩「與諸客攜酒、尋去年梅花有感。(諸客と酒を攜え、去年の梅花を尋ねて感有り)」にも「依舊」という言葉が使われている。この詩の中で、白居易は前年の春を回顧し、「…樽前百事皆依舊、點檢唯無薛秀才。(樽前 百事 皆な舊に依るも、點檢するに 唯だ薛秀才のみ無し)」と嘆いている。錢塘湖のほとりに酒を携え、詩を吟詠し、管絃を喚んで梅を愛でる宴のすべてが昨年どおりなのに、参加者の顔ぶれを敷えてみると、去年は居た薛秀才だけが居ない、というのである。紹興本には、「去年與薛景文同賞、今年長逝。(去年、薛景文と共に賞せしに、今年長逝せり)」という自注が付いている。同

じ卷のこの詩の少し前に一三四六卷二〇「和薛秀才尋梅花同飲見贈(薛秀才の梅花を尋ねて同に飲んで贈られしに和す)」が配列されている。兩詩ともに七言律詩で、第一句と偶數句の韻は、順に一三四六詩が「梅」「盃」「來」「開」「迴」、一三八八詩は「盃」「梅」「開」「來」「才」となっている。兩詩は詩題・詩形・詩意すべて符合する。兩詩を合わせ讀んではじめに雙方の詩に込められた白氏の感慨が如實に傳わってくるのである。

次に卷を隔てて呼應する例を挙げよう。那波本卷五十五「律詩」の一五四六詩と卷六十四「律詩」の三二〇四詩である。

二五四六卷五五 秘書監

大和元年(八二七)五十六歳の作。

「有小白馬、乘馭多時、奉使東行、至稠桑驛、溢然而驚、足可驚傷。不能忘情、題二十韻。(小白馬有り、乘馭すること多時、使を奉じて東行して稠桑驛に至り、溢然として驚る。驚傷すべきに足る。情を忘るる能わずして、二十韻を題す)」

能驟復能馳 能く驟せ 復た能く馳す

翩翩白馬兒 翻々たる 白馬兒

(中略)

睡來乘作夢 睡り來れば乗りて夢を作し

興發倚成詩 興發すれば 倚りて詩を成す

(中略)

昨夜猶菊秣 昨夜 猶お菊秣し

今朝尚繁維 今朝 尚お繁維す

臥槽應不起 槽に臥して 應に起きざるべし

願主遂長辭 主を願みて 遂に長辭す

(中略)

念倍燕求駿

情深項別離

銀收鈎臚帶

金卸絡頭羈

何處埋奇骨

誰家覓弊帷

稠桑驛門外

吟罷涕雙垂

三二〇四卷六五 太子賓客分司

大和九年「八三五」六十四歳の作。

「往年稠桑、曾喪白馬、題詩廳壁。今來尙存。又復感懷、更題絕句。(往年、稠桑にて曾って白馬を喪い、詩を廳壁に題す。今來れば尙お存す。又復た感懷し、更に絶句を題す)」

路傍埋骨蒿草合

壁上題詩塵薛生

馬死七年猶悵望

自知無乃太多情

路傍に骨を埋めしところ 蒿草合し

壁上に詩を題せしところ 塵薛生す

馬死して七年なるも猶お悵望す

自ら知る 乃ち太だ多情なる無からんや

前者は、五頭だて馬車の愛馬の中で一番のお氣に入りだつた白馬が、長安から洛陽に至る旅の途中で亡くなり、その時の悲しみを切々とうたいあげた大作である。彼は、人一倍多情多感で、その溢れる感性が文字の氾濫となつて表面化する。そのありあまる言葉の氾濫を彼は自分で押さえきれないのである。愛馬に五言二十韻、實に二百字もの哀悼の辭を捧げている。後者は、七年後、洛陽から下邳に至る途中、自作の舊詩を媒介にして往時の感慨に浸つた詩である。五十六歳

回顧録としての『白氏文集』

にしてなお「不能忘情」と言い、時を隔て、六十四歳になつても過去の悲しみを思い起こしている。自分で自分を「情に脆過ぎはしないか」とうたう瑞々しい感性に多情多感な白居易らしさがある。兩詩を並べた時、三二〇四詩の「題詩廳壁」の四文字と「壁上題詩塵薛生」の句が注意を引く。塵とコケに覆われた七年前の自作の詩に觸發され、再び感慨に耽る彼は、文字を媒介にして七年前の自分と再會しているのである。

次に、三首以上呼應する例として、曲江池を繰り返し回顧した作品群をみてみよう。

〇三九八卷九 盤屋縣尉

元和二年「八〇七」三十六歳の作。

「曲江早秋」

〔紹興本小字題注〕三二〇七 年作。

秋波紅蓼水 秋波 紅蓼の水

夕照青蕪岸 夕照 青蕪の岸

獨信馬蹄行 獨り馬蹄に信せて行く

曲江池西畔 曲江池の西畔

(中略)

我年三十六 我年 三十六

冉冉昏復旦 冉冉として 昏復た旦なり

人壽七十稀 人壽 七十稀なり

七十新過半 七十 新に半を過ぐ

且當對酒笑 且く 當に酒に對して笑うべし

勿起臨風歎 臨風の歎を起さずこと勿れ

〇四〇六卷九 左拾遺・翰林學士

元和三年「八〇八」三十七歳の作。

「早秋曲江感懷」

(前略)

人壽不如山 人壽は山に如かず

年光急於水 年光は水よりも急なり

青燕與紅蓼 青燕と紅蓼と

歲歲秋相似 歲々 秋相い似たり

去歲此悲秋 去歲 此に秋を悲しむ

今秋復來此 今秋 復た此に來る

○四一七卷九 左拾遺・翰林學士

元和四年「八〇九」三十八歳の作。

「曲江感秋」

〔紹興本小字題注〕五〔四?〕年作。

沙草新雨地 沙草 新雨の地

岸柳涼風枝 岸柳 涼風の枝

三年感秋意 三年 秋意を感ずるは

併在曲江池 併せて曲江池に在り

早蟬已嘹唳 早蟬 已に嘹唳

晚荷復離披 晚荷 復た離披す

前秋去秋思 前秋 去秋の思おもひ

一一生此時 一々 此の時に生ず

昔人三十二 昔人 三十二

秋興已云悲 秋興 已に云に悲しむ

今我欲四十 今 我れ四十ならんとす

秋懷亦可知 秋懷 亦た知る可し

歲月不虛設 歲月 虚しくは設けず

此身隨日衰 此の身 日に隨いて衰う

暗老不自覺 暗ひそかに老いて 自覺せず

直到鬢成絲 直ただちに 鬢 絲を成すに到る

○五七二・〇五七三卷一一 中書舍人

長慶二年「八二〇」五十一歳の作。

「曲江感秋二首 并序」

〔序〕元和二年・三年・四年、予每歲有「曲江感秋」詩。凡三篇、編在第七集卷。是時予爲左拾遺・翰林學士。無何、貶江州司馬。

忠州刺史。前年、遷主客郎中・知制誥、未周歲、授中書舍人。今

遊曲江、又值秋日。風物不改、人事屢變。況予中否後遇、昔壯今

衰。慨然感懷、復有此作。噫！人生多故。不知明年秋又何許也？

時二年七月十日云耳。

（元和二年・三年・四年、予 每歲、「曲江感秋」詩有り。凡て三

篇、編んで第七集の卷に在り。是の時 予 左拾遺・翰林學士た

り。何くも無くして、江州司馬・忠州刺史に貶せらる。前年、主

客郎中・知制誥に遷り、未だ周歲ならずして、中書舍人を授か

る。今ま曲江に遊んで、又た秋日に值り。風物 改まらざるに、

人事 屢しは變る。沉んや予 中ごろは否にして後に遇い、昔は

壯にして今は衰うるをや。慨然として感懷し、復た此の作有り。

噫！人生は故多し。明年の秋は又た何許なるかを知らざるなり。

時に二年七月十日と云うのみ。）

其一

元和二年秋 元和 二年秋

我年三十七 我れ年 三十七

長慶二年秋
我年五十一

中間十四年

六年居譚黜

(中略)

獨有曲江秋
風煙如往日

其二

(前略)

莎平綠茸合
蓮落青房露

今日臨望時

往年感秋處

池中水依舊

城上山如故

獨我鬢間毛

昔黑今垂絲

(中略)

故作詠懷詩

題於曲江路

長安城の東南隅にあつた風光明媚な曲江池は當時の行樂地で、實に

多くの唐代詩人がこの地を訪れ、詩を詠んでいる。その大半が初春を

迎え、仲春を楽しみ、晩春を惜しむ詩である。もちろん、白居易も例

外ではない。白居易は一年中おりにふれこを訪れ、嬉しい時も悲し

い時も、ここで詩を作っている。友と一緒にの時もあれば、一人だけの

時もあった。曲江池に取材した幾多の名作の中で、上記の作品群は、秋の曲江池を訪れた白居易が、自己の舊作を踏まえ、時を隔て、繰り返し、同じ主題で作詩していることで異彩を放っている。

昨日のことや數日前、あるいは數ヶ月・數年・數十年前のことを振り返り、思い出すことは、頻度の差こそあれ、誰もがすることであろうし、それを詩に詠むことも決して白居易だけに限られたことではない。しかし、「ある一つの感銘なり感慨なりを、時を隔てて繰り返し回顧し、それを文字を用いて詩に定着させる」という傾向は、白居易特有のものようである。過去の自分の作品を踏まえて、數年後に續編を作った例として有名なものに、「玄都觀」を詠んだ劉禹錫の五言絶句がある。晩年、洛陽で詩を交わし合いながら餘生を送った同い年の友人だけあって、劉禹錫の作品には、白居易と共通する點がいくつもある。そのうち、回顧詩について見ると、長めの詩のタイトルや、具體的な日付や人名・地名を丹念に記した序文に、よく似た傾向がある。

従って、こうした傾向は、かならずしも白居易だけに見られるというわけではない。しかし、白居易のように、一度ならず年を隔てて何度も何度も執拗に繰り返す詩人がほかにいるであろうか？三年連續、初秋の「曲江池」で老いを嘆き、「十四年」の歳月を経て再び感慨に耽るといった例がほかあるであろうか？時代が下れば、自らの舊作を踏まえて次の詩を作った北宋の蘇軾や、離別させられた妻のことを詩や詞で詠み、繰り返し「夢」の詩をうたった南宋の陸游がいるが、こうした特殊な例を除けば、「時間の層を成す」白居易の回顧詩は、やはり白氏特有なものと言えるのではなからうか？

ただ回顧するだけでは、「時間の層」は、何層にも重なることはない。しかし、「曲江池」を詠んだ詩のほかに「寫眞(肖像畫)」や「商

山」や「白蓮」をうたった作品群にも回顧・回想による「時間の層」が見られる。

では、一體こうした「時間の層」は、どの様にして形成されたのであろうか。

『白氏文集の批判的研究』の序章「白氏文集の成立」二十二頁で花房氏が指摘されたように、事物に「激發された感動によるのではなく、既に成った詩篇に惹起された情緒から詠い上げ」ということも「時間の層」を形成する要因となっている。花房氏のこの言葉は、二九三〇卷六〇「劉白唱和集解」の記述をもとに、唱和寄贈された作品についての傾向を指摘されたものである。白氏は文中、「一往一復欲詔不能、繇是每製一篇、先相視草。視竟則興作。興作則文成。一二年來、日尋筆硯、同和贈答、不覺滋多。…(一往一復、罷めんと欲すれども能わず。是に繇って一篇を製る毎に、先づ草を相いに視る。視竟れば則ち興作り、興作れば則ち文成。一二年より來、日々に筆硯を尋めて、同和贈答し、覺えずして滋々多し)」と述べている。

「既に成った詩篇」からひきおこされた感慨をもとに、さらに次の詩をよむという営みは、友人や知人との唱和だけでなく、過去の自分の詩についてもなされている。「曲江感秋」や「香山寺寫眞詩」がその代表例である。

宋の黃徹は『碧溪詩話』卷四の中で、次のように言っている。

用自己詩爲故事、須作詩多者乃有之。太白云、「滄浪吾有曲、相子棹歌聲」。樂天、「須知菊酒登高會、從此多無二十場」、明年云、「去秋共數登高會、又被今年減一場」。過栗里云、「昔嘗詠遺風、著爲十六篇」。蓋居渭上、醞熟獨飲、曾效淵明體爲十六篇。又贈微之云、「昔我十年前、曾與君相識。曾將秋竹竿、比君孤且直」。

蓋舊詩云、「有節秋竹竿」也。坡赴黃州過春風嶺有兩絕句。後詩云、「去年今日關山路、細雨梅花正斷魂」、至海外又云、「春風嶺下淮南村、昔年梅花曾斷魂」。又云、「柯邱海棠吾有詩、獨笑深林誰敢侮」、又畫竹云、「吾詩固云爾、可使食無肉」。

(自己の詩を用いて故事と爲すは、作詩の多き者を須ちて、乃ち之れ有り。太白、「滄浪 吾れ曲有り、相子 棹歌の聲」と云う。樂天、「須らく知るべし菊酒 登高の會、此れより 多くとも二十場無からんことを」。明年、「去秋 共に登高の會を數え、又た今年 一場を減ぜらる」と云う。栗里を過り、「昔 嘗て遺風を詠じ、著して十六篇を爲す」と云う。蓋し渭上に居り、醞熟して獨り飲み、曾て淵明體に效つて十六篇を爲ればなり。又た微之に贈りて「昔 我れ十年前、曾て君と相い識る。曾て秋竹竿を將て、君が孤にして且つ直なるに比す」と云う。蓋し舊詩に、「節有り 秋竹の竿」と云えばなり。坡、黃州に赴き、春風嶺を過りて兩絶句有り。後詩に「去年の今日 關山路、細雨 梅花 正に魂を斷つ」と云い、海外に至つて又た「春風嶺下 淮南の村、昔年 梅花曾て魂を斷つ」と云う。又た「柯邱の海棠 吾れ詩有り、獨り笑り深林 誰か敢えて侮らん」と云い、又た畫竹に「吾が詩 固より爾云う、食に肉無からしむべし」と云う。)

『碧溪詩話』に引かれた李白の句は、「送儲邕之武昌(儲邕の武昌に之くを送る)」詩の結び二句である。ただし、宋本『李太白文集』では「相子棹歌聲」が「寄入棹歌聲」となっている。李白は自信作「笑歌行」を歌って儲邕のはなむけとしたのであろう。

白居易の句は、以下の詩の一部である。

二二〇〇卷五一 蘇州刺史

寶曆元年〔八二五〕五十四歳の作。

「九日宴集、醉題郡樓。兼呈周・殷二判官。（九日宴集し、酔うて郡樓に題す。兼ねて周・殷二判官に呈す）」

二四八四卷五四 蘇州刺史

寶曆二年〔八二六〕五十五歳の作。

「九日寄微之（九日、微之に寄す）」

〇二二二卷五 下邳で服喪中

元和八年〔八一三〕四十二歳の作。

「效陶潛體詩十六首 并序」

〇二七八卷七 江州司馬

元和十一年〔八一六〕四十五歳の作。

「訪陶公舊宅 并序」

〇〇一五卷一 校書郎

元和元年〔八〇六〕三十五歳の作。

「贈元稹詩」

〇〇二七卷一 京兆戶曹參軍・翰林學士

元和三年〔八〇八〕三十七歳の作。

「酬元九『對新栽竹有懷』見寄」

「關連作品 元稹『種竹詩』 并序」

李白の例が自己の舊作を「我有曲」の「曲」一文字ですませることで贅言を避けたのに對し、白・蘇兩氏の例はいずれも舊作と新作との相乗効果をねらっている。「去年……」「昔年……」とうたう蘇軾の用例が、白居易の句法に類似していることも興味深い。

『碧溪詩話』は、「自己の詩を用いて故事と爲すは、作詩の多き者を須ちて乃ち之れあり」と記しているが、白居易の場合は、逆に「自己

の詩を用いて故事と爲す」という傾向が、作品量を多くしていると言えるのではなからうか？

『碧溪詩話』に引かれた白詩の用例のうち、特に注目すべきは、二二〇〇卷五一「九日宴集……」である。この詩は、九月九日の重陽節をうたったもので、節句を詠んだ詩としては、とりわけめずらしくはない。めずらしいのは、この詩に、「前年」「去年」「今年」と三層の時間が入り込んでいることである。さらに興味深いことは、二四八四卷五四「九日寄微之」の詩の結びに、この詩の結句を踏まえて、「去秋 共に登高の會を數え、又た今年 一場を減ぜらる」とうたっていることである。これは「全てを傳えようとし、全てを語り盡さずにはおれない」彼の「饒舌」という性癖と、積もり積もって堆積した文字を思い切って捨て去ることのできない「作品への愛着」の強さと關係が有りそうである。

詩という表現形式は、含蓄を尊び、餘韻を重んじ、言葉節約し、推敲の際には文字を削ることに主眼を置くのが普通である。ところが、白居易は言葉を洗練させながら描寫を重ね、引き算ではなく足し算のかたちで作品を増殖させて行く。例えば、長安郊外にある悟眞寺を訪れた時のことを、王維は五言十二韻一百二十字でまとめているが、白居易は五言一百三十韻、合計一千三百字を費やし、王維の十倍を超える長編に仕立て上げている。『古歡堂集』の中で、清の田雯は、白居易の「琵琶行」が杜甫の「孫大娘舞劍器」詩を換骨脱胎した「演法」であることを指摘したりえ、「鬼脛何短、鶴脛何長。續之不能、截之不可。各有天然之致。（鬼脛何ぞ短からん、鶴脛 何ぞ長からん。之を續くは能わず、之を截るは不可、各おの天然の致 有り）……」と言っている。兩者を等價値に評價する田氏の態度は至當である。白

居易は、杜甫や王維の詩に想を得て、自作をその何倍もの長さに膨らませてゐる。これは、先人の名作に對する挑戦でもあり、表現の限界に迫る創作意欲のあらわれでもあらうが、同時にみずからの性癖である「饒舌」を素直に楽しむ詩作の歡びの現われでもあったはずである。

二九八七卷六一「裴侍中晉公以集賢林亭即事詩二十六韻見贈、猥蒙徵和。才拙詞繁。輒廣爲五百言以伸酬獻。(裴侍中晉公、『集賢林亭即事詩二十六韻』を以て贈られ、猥りに和を徵するを蒙る。才拙く詞繁し。輒ち廣めて五百言と爲し、以て酬獻を伸ぶ)」は、裴度から贈られた二十六韻の詩に應えて獻上した五百言五十韻からなる長編である。詩題では「才拙詞繁」と謙遜しているが、「客有詩魔者、吟哦不知疲。乞公殘紙墨、一掃狂歌詞。(客に詩魔なる者有り、吟哦して疲れを知らず。公に殘紙墨を乞うて、狂歌詞を一掃す)」とうたうごとく、「詩魔」が白氏の「饒舌」を動かしているのである。

また、卷五十三の二三一九詩の題の「餘思未盡、加爲六韻。重寄微之(餘思 未だ盡きず、加えて六韻を爲り、重ねて微之に寄す)」という言葉に、白氏の「饒舌」ぶり、と、そうせずにおれない氣持ちとを讀み取ることが出来る。

自己の作品に對する白居易の「愛着」は、一四八六卷二八「與元九書」の「…其餘雜律詩、…今銓次之間、未能刪去。(其餘の雜律詩は、…今銓次の間、未だ刪り去ること能はず)…」と云う言葉や二〇一三卷四五「策林序」の中の「凡所應對者百不用其二。其餘目以精力所致、不能棄捐。(凡そ應對する所の者 百に其の一二も用いず。其餘目は精力の致す所なるを以て、棄捐する能はず)」という言葉に見て取ることが出来る。これを劉禹錫の「劉氏集略説」の「…前年…

書四十通、…刪取四之一、爲『集略』…前年…書四十通、…刪りて四の一を取り、『集略』と爲し…」という潔い態度と比較する時、白氏の自作に對する「愛着」は、自己の分身を切り捨て得ない「未練」とも思えてくる。

三〇二四卷六三 洛陽 太子少傅分司

大和八年(八三四)六十三歳の作。

「題文集櫃(文集の櫃に題す)」

(前略)

我生業文字 我れ生れながらにして文字を業とし

自幼及老年 幼きより 老年に及ぶ

前後七十卷 前後 七十卷

大小三千篇 大小 三千篇

誠知終散失 誠に終には散失するを知るも

未忍遽棄捐 未だ遽に棄捐するに忍びず

(後略)

生涯、「文字」を「業」とした白氏にとって、「三千篇」は人生の記録である。日記のどの頁も、アルバムの寫眞のどの一枚も、その人にとっては大切な思い出であるように、「一篇」たりとも、自ら「棄捐」するに忍びないのである。

c、『文集』編集過程における「時間の層」

三六七三卷七一「白氏集後記」の冒頭に「白氏前著『長慶集』五十卷、元微之爲序。『後集』二十卷、自爲序。今又『續後集』五卷、自爲記。前後七十五卷。詩筆大小凡三千八百四十首、集有五本。(白氏の前著『長慶集』五十卷は元微之序を爲り、『後集』二十卷は自ら序を爲る。今また『續後集』五卷、自ら記を爲る。前後七十五卷。詩

筆大小 凡て三千八百四十首、集は五本有り」と記されている。白氏は親友元稹が序文を記し命名してくれた『白氏長慶集』五十巻二千一百九十一首を核とし、これに『後集』二十巻を重ね、さらに『續後集』五巻を重ねて七十五巻の大集とした。その『前後續集』本は詩・文／詩・文／詩・文の層を成している。その七十五巻が完結するに至るまでの過程を辿ると、より複雑な「時間の層」が見えてくる。白居易は、あるまとまった量に達するたびに作品を巻軸に仕立てているのである。

貞元十六年〔八〇〇〕二十九歳

行巻のための自撰集〔文二十首・詩一百首〕。

元和十年〔八一五〕四十四歳

詩集十五巻を編集。

長慶四年〔八二四〕五十三歳

『白氏長慶集』五十巻

大和二年〔八二八〕五十七歳

『後集』五巻

『元白唱和因繼集』十六巻

大和三年〔八二九〕五十八歳

『劉白唱和集』二巻

大和六年〔八三三〕六十一歳

『劉白唱和集』を三巻に。

大和八年〔八三四〕六十三歳

洛詩を編む。二九四―二九六―「序洛詩」

大和九年〔八三五〕六十四歳

廬山の東林寺に『白氏文集』六十巻を奉納。『後集』十巻

回顧録としての『白氏文集』

開成元年〔八三六〕六十五歳

洛陽聖善寺に『白氏文集』六十五巻を奉納。『後集』十五巻

『劉白唱和集』を四巻に。

開成四年〔八三九〕六十八歳

蘇州南禪院に『白氏文集』六十七巻を奉納。『後集』十七巻

開成五年〔八四〇〕六十九歳

『白氏洛中集』十巻

會昌二年〔八四二〕七十一歳

『後集』二十巻を東林寺に送る。

『白氏文集』七十巻

會昌五年〔八四五〕七十四歳

『續後集』五巻を加えて『白氏文集』七十五巻を完結。定本五

部のうち二部を甥と外孫に託し、三部を寺院に奉納。

會昌六年〔八四六〕七十五歳で逝去。

樹齡と共に外に向かつて密になる年輪のごとく、老いへと向かつて密度を増す「時間の層」は、白氏の生きた證しであり、人生の年輪であった。

まとめ

白居易の「自らをみつめ、自らを語る」詩は、陶淵明や杜甫の影響下にあるであろうが、自らの文集に日記や回顧録にも似た「人生の記録」としての役割を付與した詩人のさきがけは、白居易である。この点においても、宋詩の特色の一つである「日常性」は、中唐の白居易にまで遡ることができる。

一二六五巻一九「偶題閣下廳」詩で「…平生閑境思、盡在五言中。」

〔平生 閑境の思、盡く五言中に在り〕とうたい二九一二卷五九「故京兆元少尹文集序」と三七九八紹興本卷一〇「醉吟先生墓誌銘 并序」で「開卷而盡可知也。（卷を開けば盡く知るべし）」と言ふ白居易は、三〇七二卷六四「感舊詩卷（舊詩卷に感ず）」で「…二十年前舊詩卷、十人酬和九人無。（二十年前 舊詩卷、十人酬和し 九人無し）」とうたい、三六九六金澤文庫本卷六五「醉中見微之舊卷有感（醉中、微之の舊卷を見て感有り）」で「今朝何事一霑襟、檢得君詩醉後吟。（今朝何事ぞ一たび襟を霑す、君の詩を檢し得て 醉後に吟ず）」とうたっている。そして、〇二二七五卷六「湓浦早冬」で「…日西湓水曲、獨行吟舊詩。…但作城中想、何異曲江池。（…日は西す 湓水の曲、獨行して 舊詩を吟ず。…但だ作す 城中の想い、何ぞ曲江池と異らん）」とうたい、二二四一巻五一「對鏡吟」で、「白頭老人照鏡時、掩鏡沈吟舊詩。（白頭の老人 鏡に照らす時、鏡を掩いて沈吟し 舊詩を吟ず）」とうたっている。友人の「舊詩卷」や自らの「舊詩」を、過去の感懐を再現し今の感慨を深める「よすが」としていたのである。

白居易は、文字を媒介に遠く離れた友や死別した友と語り合い、文字を介して過去の自分と對面していた。跡繼ぎの男兒にめぐまれなかつた彼が、自ら『文集』を編集し、七十五卷の『文集』を五部用意して後世に傳えたのは、文字を媒介として今日の我々と語り合いたかつたからではなからうか？生前、彼が自らの作品を読み、かつての自分と再會したように、我々は、『文集』を回顧録として讀むことで、一千年の時を越えて彼と再會することができる。

來世を信じ、「今生世俗の文字」「放言綺語」を以て「轉法輪の縁」とせんことを願った白氏は、「來生の縁會」という言葉を殘している。

注

〔1〕 後の話の種に詩を作っておくという「張本」という言葉は、そうした白氏の創作態度を象徴している。

一一〇七卷一七 江州より忠州に至る途中

元和十四年（八一九）四十八歳の作。

「十年三月三十日、別微之於澧上、十四年三月十一日、夜、遇微之於峽中、停舟夷陵、三宿而別。言不盡者、以詩終之。因賦七言十七韻以贈、且欲寄所遇之地與相見之時、爲他年會話張本也。（十年三月三十日、微之に澧上に別れ、十四年三月十一日、夜、微之に峽中に遇い、舟を夷陵に停め、三宿して別る。言の盡くさざるは、詩を以て之れを終えんとす。因りて七言十七韻を賦して以て贈り、且く遇う所の地と相い見るの時とを記し、他年の會話の張本と爲さんと欲するなり）」

（前略）

往事渺茫都似夢 往事 渺茫 都て夢に似たり

舊游零落半歸泉 舊游 零落 半ば泉に歸す

（後略）

三五六卷六九 洛陽 刑部尙書致仕後

會昌二年（八四二）七十一歳の作。

「歲暮夜長、病中燈下、聞盧尹夜寢。以詩戲之、且爲來日張本也。（歲暮の夜長、病中燈下、聞盧尹夜寢。以詩戲之、且爲來日張本也。且く來日の張本と爲すなり）」

（前略）

當君秉燭銜盃夜 君 燭を乗り 盃を銜む夜に當る

是我停燈服藥時 是我 我れ燈を停め藥を服するの時

（後略）

〔2〕 紹興本『白氏文集』の隨所に「自此後…作（これより後は…）」「官職・場所」…の作」といった注が書き加えられている。これによって

讀者は『文集』全體を有機的に前後相關連させて讀むことができる。

(3) 「依舊」を詩語として用いる詩人はかなり偏っていて、中唐以降の一部の詩人に限られる。管見するところ、この言葉を最初に詩に用いた詩人は杜甫のようである。

「依舊」白居易二十例

〇二六四・〇五四五・〇五七三・〇五九六・〇六一四・〇六五五・〇六五六・〇七七九・一一五六・一一六五・一一七八・一二三三・一二八六・一三三二・一三八八・二三三〇・二三三九・二五五一・三三二五・三四二五

杜甫四例／元稹六例／劉禹錫四例／皮日休四例

『毛詩』・『楚辭』・『文選』・李白・王維・孟浩然・錢起・韋應物・韓愈・柳宗元・李賀・孟郊すべて用例無し」

(4) 参考までに作品番號を列記する。

「重到」…六例

〇四二三・〇六五五・〇八一六・〇八三九・一二二六・一三三〇

「重過」…四例

〇五六六・〇八一五・一三三〇・一二八八「詩句」

「重尋」…一例 〇七〇八

(5) 二〇二三卷四五「策林序」参照。

(6) 那波本は三六一九詩の詩題を「游趙村杏村」に、首句を「游村紅杏毎年開」に作る。資料的根據に乏しいが、一應、『全唐詩』の題注に従って詩題の「游」は衍字と考え、『全唐詩』や狂立名本に従って首句の「游村」を「趙村」に改める。朱金城氏は『白居易集箋校』(四)二五四六頁で「狂吟七言十四韻」の「游村果熟饋爭新」を引いて、「游村」が「趙村」の別名らしいことを示唆している。ただし、この「游」字も「趙」の誤りかもしれない。おそらく行・草書で書かれた字體の類似による混

回顧録としての『白氏文集』

亂であらう。

(7) 六十八歳の作である三六一〇卷七〇「不能生忘情吟 并序」にも愛馬に寄せる情が切々と綴られている。寵妓「樊素」を「虞美人」に、愛馬「路」を項羽の「騅」にみたてての絶唱である。

(8) 冒頭に、

十載定交契 十載 定交の契り

七年鎮相隨 七年 鎮に相い隨う

長安最多處 長安 最も多き處

多是曲江池 多くは是れ曲江池

と歌い、

況乃江楓夕 況んや乃ち江楓の夕べ

和君秋興詩 君が秋興の詩に和すをや

と結ぶ元稹の「和樂天『秋題曲江』」五言十六句は、白居易の〇四一七卷九「曲江感秋」に唱和した詩である。

(9) 劉禹錫の「元和十一年、自朗州承召至京。戲贈看花諸君子。(元和十一年、朗州より召を承けて京に至り、戯れに花を看る諸君子に贈る)」と「再遊玄都觀(再び玄都觀に遊ぶ)」絶句 并引」は呼應している。

「重至衡陽、傷柳儀曹。(重ねて衡陽に至り、柳儀曹を傷む)并引」は、劉禹錫が柳宗元亡きあと、かつて二人で南行した時に通った衡陽にさしかかって回顧した詩である。

劉禹錫は、父の諱「緒」を避けて同音の「序」の文字のかわりに「引」を用いているが、詩題に添えた「引」の中で作詩の動機や制作時期やいきさつなどを詳述している。

(10) 白居易は、全盛期に描かれた自分の「寫眞(肖像畫)」をおりに觸れて取り出し、取り出しているは繰り返して感概に浸っている。

〇二二九卷六 左拾遺・翰林學士 元和五年「八一三」三十九歳の作。

〔自題寫眞〕

〇三二五卷七 江州司馬

元和十二年「八一七」四十六歳の作。

〔題書寫眞圖〕

一〇三九卷一七 江州司馬

元和十三年「八一八」四十七歳の作。

〔贈寫眞者〕

二二七三卷五二 洛陽 刑部侍郎

大和三年「八二九」五十九歳の作。

〔感舊寫眞〕

三五四二卷六九 洛陽 退職後居士

會昌二年「八四二」七十一歳の作。

〔香山寺寫眞詩 并序〕

詳しくは、「自照文學としての『白氏文集』—白居易の『寫眞』—」

〔日本大學人文科學研究所』『研究紀要』第三十八號〕参照。

(11) 白居易は、長安、江州、忠州、長安、杭州と地方へ出、中央に戻る

たびに商山路を通っている。先に左遷された親友元稹もここを通り、

「桐花詩」を詠んでいる。一一八三詩の「桐樹」と「題名處」に注目。

〇四二二卷九 左拾遺・翰林學士

元和五年「八一三」三十九歳の作。

〔初與元九別、後忽夢見之。及寤而書適至、兼寄桐花詩。悵然感

懷、因以此寄。(初めて元九と別れ、後に忽ち夢に之れを見る。

寤むるに及んで書、適たま至り、兼ねて『桐花詩』を寄す。悵然

として感懷し、因りて此れを以て寄す)〕

一一八二卷一八 忠州刺史、司門員外郎

元和十五年「八二〇」四十九歳の作。

〔商山路有感〕

一一八三卷一八 忠州刺史、司門員外郎

元和十五年「八二〇」四十九歳の作。

〔商山路驛桐樹。昔與徵之前後題名處。(商山路驛の桐樹。昔、徵

之と前後して名を題せし處)〕

一一一〇卷二〇 中書舍人、杭州刺史

長慶二年「八二二」五十一歳の作。

〔商山路有感 并序〕

一三一二卷二〇 同上

〔重感〕

(12) 白居易は、「白蓮」を江南から洛陽に持ち歸り、蘇州刺史時代を回

顧する「よすが」としている。

二五四九卷五五 洛陽 秘書監

大和元年「八二七」五十六歳の作。

〔種白蓮〕

二六九三卷五六 洛陽 河南尹

大和六年「八三二」六十一歳の作。

〔六年秋、重題白蓮。〕

二九七九卷六二 洛陽 太子少傅分司

大和八年「八三四」六十三歳の作。

〔感白蓮花〕

三三八六卷六七 洛陽 太子少傅分司

開成三年「八三八」六十七歳の作。

〔蘇州故吏〕：華亭鶴死白蓮枯。

(13) 白居易は二三四五卷五三「詩解」の中で、「舊句時時改(舊句時

々改む)と言っている。

那波本卷六十三の三〇三八「七月一日作」詩は、結句の後に「是一篇

重出、而少異、故依舊存之。(是の一篇 重出す。而れども少しく異な

る。故に舊に依りて之れを存す」という注が付いていて、同じ巻の少し前にある三〇二九「兩歌池上」詩と後半が重複している。「七月一日作」を推敲・削除して「兩歌池上」としたと考えられなくもないし、後人による改變の可能性も皆無ではないが、白氏の性癖から推すに、自ら加筆増補して「七月一日作」としたのではなからうか。紹興本は、「七月一日作」だけを載せている。

(14) 汪立名本では「徵之整集舊詩及文筆爲百軸以七言長句寄樂天。樂天次韻酬之。餘思未盡、加爲六韻。(徵之 舊詩及び文筆を整集して百軸と爲し、七言長句を以て樂天に寄す。樂天 次韻して之に酬ゆ。餘思未だ盡さず、加えて六韻を爲る)」となっている。元稹が贈った七言律詩「郡務稍簡、因得整比舊詩、并連綴焚削封章。繁委篋笥、僅逾百軸。偶成自歎、兼寄樂天。(郡務 稍 簡たり、因りて舊詩を整比し、并びに焚削の封章を連綴するを得たり。篋笥に繁委し、僅んど百軸を逾ゆ。偶たま自歎を成し、兼ねて樂天に寄す)」に白居易は三三一八卷五三「酬徵之(徵之に酬ゆ)」の七律で應えたが、それでも言い足りないので七言十二句からなる三三一九詩を追加したのである。

(15) 三六七三卷七一「白氏集後記」参照。

(16) 二九五五卷六一「蘇州南禪院白氏文集記」および三六〇八卷七〇「香山寺白氏洛中集記」参照。

(17) 三五九八卷六九「送後集往廬山東林寺、兼寄雲卓上人。(後集を廬山の東林寺に往けて送り、兼ねて雲卓上人に寄す)」参照。

追記

本論文は、お茶の水女子大學で開催された平成六年度日本中國學會第四十六回大會における口頭發表をまとめたものである。

口頭發表準備中に楮斌傑先生より、發表時に太田次男先生、草稿執筆中に青山宏先生、そして投稿後に清水茂先生より御教示を賜った。諸先

回顧録としての『白氏文集』

生に心より感謝の意を表したい。
五月三十一日、平岡武夫先生が八十五歳の天壽を全うされた。「スカタン言うたら白居易が泣くで」。校正中、恩師の厳しくそして温かい在りし日の叱聲が響く。